

第十九回 玄和全国競書大会優秀作品



中村 秀月

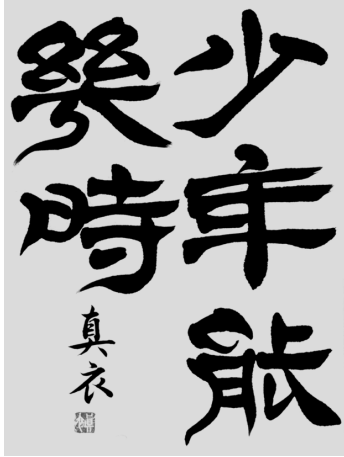
審査所感

例年通りの十一月二十三日（勤労感謝の日）、玄和全国競書大会の審査が行われた。常に前向きな姿勢を考える玄和は今回新しい試みとして、特に学生部の審査に玄和書道会常任理事の先生方全員に審査の協力を依頼し、審査員の人数を増やすことを試みた。少しでも幅広い視野からの公平なる審査を考えることである。だから今年の審査結果には、昨年以上の間違いの無い結果であると審査員一同自負している次第である。好成績だった各ご社中の先生、そして各人には、その結果に大いに自信を持って頂きたい。

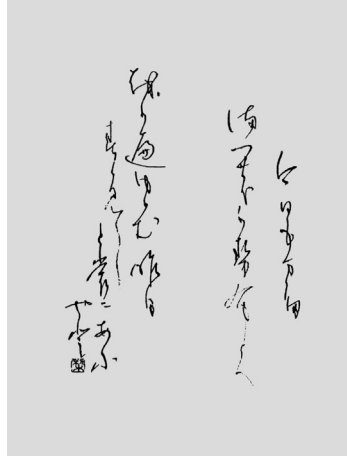
さて今年の出品点数については、一般部はほぼ例年通りで、半紙部門が昨年の八点増であったが、特記すべきは学生部に百点以上の出品点数増があったことである。少子化を懸念される昨今、更には書写教育の低迷をも懸念される今、玄和の先生方の書教育に対する熱心さを感じることが出来たのは感謝感である。そして何よりも審査された教育部の作品全てが堂々としており、力強く一生懸命さが伝わってくる躍動感あふれる作品を目にして自然と笑顔になっていたのは審査員全員だったと思う。更には、それぞれの作品の各文字を注視すると、例えば点一つにしても【打つのではなく書く】といったように、文部科学省の告示する『学習指導要領』に準拠した各先生の指導方針がしっかりと受け止めることが出来た。

一般部の作品については牛歩

— 玄和書道会賞 —



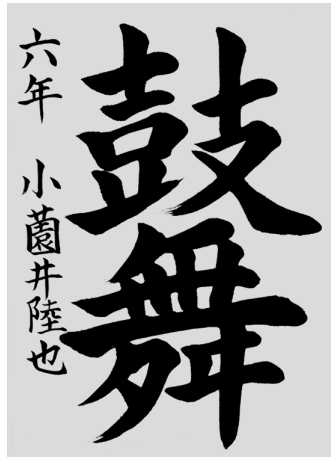
外崎 真衣(高三)



田中 梨風



横尾龍ノ佑(小二)



小菌井陸也(小六)



鈴江 紬(中三)

ながらレベルアップしているように感じられたのはとても喜ばしい。所謂『春浦調』を学んできた我々の書く殆どの作品の《章法》は、今更ながら素晴らしいの一言に尽きる。ただ、問題はそこからで、如何に書き込んだ作品であるか、書き込んだ作品は何がどう違うのか、そこまで拘って書き込んだ作品は見れば判るのだが、残念ながらまだまだ少ないと感じられた。

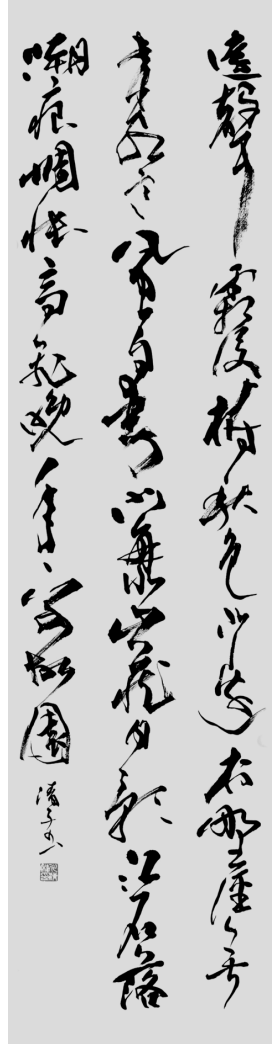
又、一般部の書作品となると色々な表現が求められるが、少なくとも漢字作品では文字のデフォルメに細心の注意をして頂きたい。誰もが納得出来るそのラインは、先ずその元になっている漢字を把握することである。手元の《五體字類》にばかり頼るのではなく、多くの古典を見てそこから学び、特に草書や篆隷を揮毫する場合は、相当に慎重になって欲しい。残念ながら今回も、まだまだ【怪しい字】が目に入った。文字を利用したデザインを書くのではなく、文字を最後まで文字として書かねばならない。読める読めない、正しい正しくないは揮毫した本人が決めるものではないからだ。パソコン等、文明の進歩に伴い、場合によっては文化が衰退していく懸念に私達はどう対応していくのか。それは、大袈裟かもしれないが、先ず私達が《正しい文字を書くこと》を理解し、それを一人でも多くの子供達に伝えることであると感じられてならない。

第十九回 玄和全国競書大会
審査委員長 西 墨濤

— 春 浦 賞 —



吉田 佳永



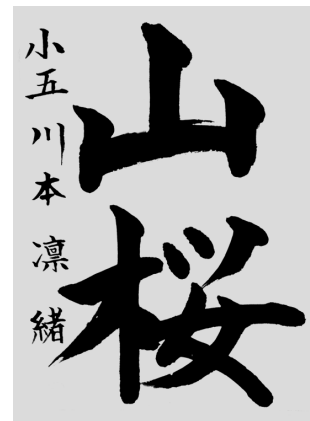
市川 清子



羽田 招佳



宮川 怜郁(高二)



川本 凜緒(小五)



鈴江葉乃子(中一)



小野 仁菜(小一)

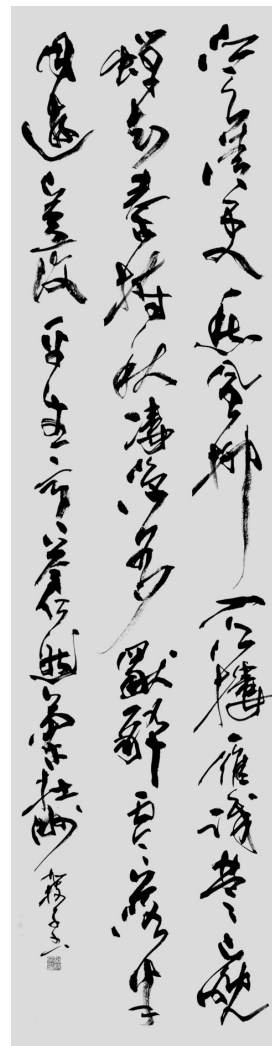
— 玄和書道会会長賞 —



佐藤 志乃



近藤 風光



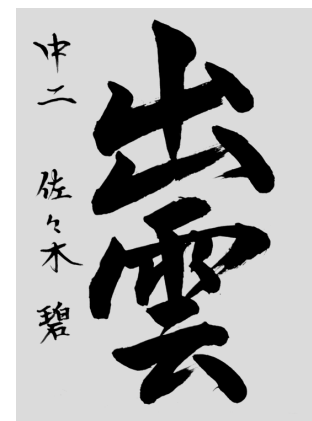
北原加枝子



外崎 朱夏(高一)



戸沢 千智(小四)



佐々木 碧(中二)



池光 美月(小三)